

尿中に腫瘍細胞が出現したマントル細胞リンパ腫の1例

◎戸浪 智里¹⁾、埴 峰秋¹⁾、小林 美乃里¹⁾、須藤 正美¹⁾、遠藤 繁之¹⁾
国家公務員共済組合連合会 虎の門病院¹⁾

【はじめに】尿中には尿路上皮癌などの上皮系腫瘍だけでなく、悪性リンパ腫などの非上皮系腫瘍の異型細胞が出現することがある。マントル細胞リンパ腫は、マントル層内側のB細胞に由来する中等度B細胞リンパ腫であり、全体の約2%を占める。【症例】87歳男性、左側腹部に違和感を自覚し、近医を受診し脾腫と腹部リンパ節腫大を指摘された。また、前医にて血算異常を指摘され、血液疾患の関与が疑われたため、2016年に当院を紹介受診した。CT検査を施行したところ、脾腫と複数のリンパ節腫大を認めた。血液検査にて末梢血の血液像異常(WBC $22.1 \times 10^3/\mu\text{L}$ (リンパ球様細胞 59.5%))を認めた。フローサイトメトリー法(以下FCM法)ではリンパ球の約82%がCD19(+), CD20(+), CD5(+), CD23(一部+), HLA-DR(+), λ (+), κ (-)であり、クローナルなB細胞集団と考えられた。また血液FISH法にてCCND1-IGH(+)を認めた。骨髓像にて形態学的に明らかな異型性を有するリンパ球様細胞が80%程度みられ、骨髓浸潤が示唆された。また骨髓吸引検体の免疫染色ではcyclinD1(+), BCL2(+), BCL6(-)を示した。以上の検査よ

りマントル細胞リンパ腫と診断された。治療がすぐに開始されたものの2022年に再燃した。2023年、腫瘍崩壊による腎障害をきたし、透析が開始された。その際に尿定性、尿沈渣検査を施行した。【検査結果】尿所見：混濁した血尿 尿定性検査：pH 7.0、蛋白(3+)、潜血(3+) 尿沈渣検査：非糸球体赤血球 ≥ 50 個/HPF、白血球が10~19個/HPF、細菌(-) その他に、大きさ約20 μm 、N/C比が非常に高く裸核状で、核小体著明、核クロマチンの増量を示した異型細胞を孤立散在性に認めたため、尿検体のFCM法を行った。その結果、CD19(+), CD5(+), CD22(+), λ (+), κ (-)であった。【考察】以上より、尿中に出現したリンパ球様細胞は、マントル細胞リンパ腫の腫瘍細胞であることが示唆された。CT検査にて右腎洞、骨盤底、傍直腸、大動脈、下行結腸にリンパ腫が確認されており、右腎洞か骨盤底由来の異型細胞が尿中に紛れ込んだと考えられた。【まとめ】今回我々は、尿中にマントル細胞リンパ腫の細胞が出現する極めて稀な症例を経験した。非上皮系腫瘍の異型細胞に対し、FCM法を用いることは有用であった。